

779

特241

806

北支皇軍慰問に使用して

皇民社 田村 甚藏
北海道帯廣市

37
6



* 0057341000 *

2

0057341-000

特241-806

北支皇軍慰問に使用して

田村甚藏・〔著〕

皇民社本部

昭和13

AJF

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月23日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものである。

F-241
856



人 雷

頭 山 滿

水雷・地雷・空雷と科學兵器の發達は殆んど停止する所を知らず、
 向後更に一歩進歩發達を見るは必然なるも、之等の一切を超越して
 我國には世界の追従を絶対に許さざる人雷が有る。如何なる堅岩巨
 艦も身を以てする人雷の前には三文の價值もない。科學の根城に立
 て籠つて偉ら相な事を言ふなら、どうじや一番眞劍勝負の體當りで
 と言ふのが翁の萬丈の氣焰で有る。

奮然志身墨跡
 忠魂義魄榮行天
 被劍刺、死於道
 行請我皇千、萬年

劉子之隱士

西の劍少暗戟塵
 中軍所向敵遂巡
 由來の神の國
 抗日任謀之抗社
 時予感懷銘一

劉子之隱士

吟 譯

- 1 奮戦身を忘れて壘壁を破る、忠魂義魄は天より哀く。
創を被りて刻々死期迫るも、猶ほ壽る我が皇の千萬年。
- 2 四百餘州、戦塵暗し。皇軍向ふ所、敵遠巡す。
由来日本は神明の國。抗日の狂謀は是れ抗神。

從三位 鹽澤 健

序

一旦緩急有るの秋、即ち身を鴻毛の輕きに比し勇躍其難に膺る。之を是れ我が大和民族の傳統的氣魄なりとす。國基據て以て堅く、國運據て以て隆なり。支那軍閥の蒙、遂に己れを知らず。

夙に排日、侮日の策を弄して友邦の誼を示さず、剩さへ屢ば 皇軍を冒さんとして其暴狀許し難きもの有り。然りと雖も東亞永遠の和平を好愛するの我は、其忍び難きを忍びて彼の啓蒙に努めしも遂に成らず、今夏暴支膺懲の師を進むるの外なきに至れり。爾來半歲、皇師嚮ふ所敵なく、今や敵の首都南京を屠りて威武中外に振ふ。蓋し快事と謂ふべし。

然りと雖も征戰萬里、或は濁流を渡り、峻嶮を越え、困苦具さに嘗めて而かも欣然として馬革に屍を包む忠烈勇武なる我が將兵を想ふの時轉た感慨胸に迫るもの有り。

這次郷友田村甚藏君北支駐屯 皇軍の慰問を果せりとて來り、告ぐるに其真相を以てす。而して君が繼かに旬日の見聞は克く戰陣將士の心情を捕へて餘蘊なし。

田村君、爲人果斷力行、苟くも踟躕あるなし。這回の行亦た君が烈々たる愛國の至情に發す。

而して君は現に帶廣市會議員たるの要職に在り、閑を得て市内出征者の家族を慰問し、以て銃後の完璧を期せんとす。蓋し稀に見るの美譽と謂ふべし。君一度び歸京するや直ちに日比谷公會堂



に走りて切々血を吐く如き報告演説に聴衆を感憤興起せしめ、今亦た其見聞を草して之を知友に頒ち、以て銃後國民を覺醒せしめんとす。其機宜に適せるや論なし。余に囑するに卷頭の序言を以てせらる。素より其器に非ざるなり。唯夫れ郷友、辭するに詞なきを奈何せん。即ち感を述べて序に代ふ。

昭和十二年師走

東京寓居にて

竹 花

一

卷 頭 言

支那の暴慢無禮から計らずも惹起した此度の戦闘に大和民族の血は逆流した。我の不擴大方針は反つて彼の誤れる自負心を助長し擴大に亞ぐに擴大、果ては彼等の首都迄も失ふに至つた。蔣介石の嚙語も恐らくはこゝしばしの間だろう。しかし支那を斯く誤らしめた傀儡師英露との對見は是からで有る。彼等の踊らせた蔣と言ふ人形は首が落ちても傀儡師の箱を粉碎して置かぬと亦何を出すか判らない。此の意味に於て戦闘はまだ序幕に入つた計りだ。陸に海に將た空に 皇軍の勇奮健闘は鬼神を泣かして居る。我等銃後を護る者としては更に緊禪の要、切なるものが有る。奈何に我が將兵が強く共銃後の後援一日を缺く時は忽ち孤立に陥れるのだ。戒しむべきは銃後國民の偷安で有る。這回北支戦線慰問に旬日を費やし皇軍活躍の涙ぐましき實相を見聞して其一端を小冊子に収めて之を各位に頒つ事とした。

旅次匆忙の間繰かに蒐録せしものにして意其一端を盡さず行文亦杜撰幸に諒とせられん事を。

國士頭山滿翁並に鹽澤健先生、特に此舉を賛せられ、寄するに揮毫、詩文を以てせらる。光榮之に過ぎず。即ち卷頭に掲げて其の御好意を拜謝する。猶ほ戰陣に於て將兵各位が寄せられたる絶大の御厚情は、お慰めに行つて反つて慰められたかの感、茲に深甚の謝意を表すると共に各位の武運長久に一段の御健闘を祈願する次第である。

此項締切の直前戸外に號外の振鈴を聴く。曰く「コミンテルンの走狗大漁」と、蓋し國辱の一つ。希くは此機に於て内外の清掃を達成せられん事を。

昭和十二年師走

東京客舎にて

田村甚藏

北支皇軍慰問に使して

下關乗船

人もし私に對してこの世の中の一番辛い事は何かと聞かば、私は何等の考慮を要せず言下にソレハ船暈と答へるで有ろう。山野を跋涉して飢に寒さに殆んど危地に陥つた事もないではなかつたが、凡そ體驗中の苦しい事は何としてもこの船暈以上のものは無い。海國日本に生れ乍ら餘りにも臍甲斐ない自分を見出して情けなくも成つて來る。

萬丈の波濤は岩に激し、さしもの巨船も浪のまに／＼、とでも言はれる頃の船暈ならマダ友達も有るうに、私の船暈と言つたら實は餘りに簡單に失してる。先づ棧橋を渡る頃には早くも幾パーセントかの症状は現はれて來る。船に這入るともう三割程度の罹病だ、出帆と成ると五割、のたり／＼の海原でポーとでも汽笛を聞かされると何の事はない完全に百パーセントの船暈患者と成つて了ふ。多少浪が有りますとでも聞かされちやモウ地獄の三丁目だ。

かうした風に船暈競争文けにはたしかに選手權を獲得の自信を有する自分文けにまた生涯の惱みの

種子とも成つてゐる。そうした私が今次計らずも玄海灘を航つて北支に乗り込まうとする其氣構へをす

る迄には相當に自問自答が行はれたので有つた。門司の棧橋は先づ渡つた。船にも乗つた。お隣さんの話によると此航海は樂だと言ふ。だが自分には何となく着手すべき重大の任務が有るかの如くに一種の焦躁氣分さへ起つてゐる。

定時の出帆は豫報された。錨を巻く音がいやに神経をいら立たせる。雑音を聞くまいと焦ると焦る程一切の音波はみんな私の耳朵に集まる。心機一轉を策して他の事を考へて見やうと、かけ離れた方面に考へをそらしては見るが中々に出て來ぬ。其内にグワラ／＼の錨の音は止まつた。微かに船體が揺いだのは岸壁を離れたのであらう。風は餘りにないらしい、同乗客は交



村田たしに手を骨骸

々とデッキに出たり入つたり、此間オーバを顔に被つて無念無想の心境を捕へやうと呼吸を數へたり脈を數へたり、ソレデモともすれば乗船航海中と言ふ強迫觀念は頭をもち上げてくる。

脈の數が何時の間につきたのか身は全く安樂界にフワリ／＼と飛び出して仕舞つた。けた、ましい音と身の動搖に氣がつくと之はしたり、我が乗る船は釜山埠頭に完全に著いたので有つた。此間八時間、自分は此八時間を只だの一睡で乗り切つたのだ。而かも船暈一つせずに玄海灘を横斷した自分を見出した時の嬉しさ。不思議なこの現象！と考へた瞬間、ア、そうだ！と乗船三十分前に頓服したアノ絶對船暈せぬ藥を想ひ出した。出發前帶廣の知友島田病院藥局長加羽澤氏が特に船暈防止のため下さつた其藥效で有つたのだ。尤も一服づ、と言はれたのを一度に三服やつた事を白狀して置く。釜山上陸の印象は別に何も無い。内地の港に入つたと同様だ。建物も相當に高莊に、道行く人も和やかな情勢で有る。いざさらば之より廣軌レールによる初旅として先づ奉天指して進發の事にしよう。

兵 站 病 院

十二月二日朝奉天に著いた。直ぐの連絡列車は天津泊りとなる。六圓の宿錢は非常時に泳ぐ私共には苦手だ。奉天午後二時五十分發は翌朝の七時に天津に著く事が出来る。汽車の宿は茶代すら要らない。そこでこの尊い時間を活用して〇〇病院に傷病兵を御見舞する事にした。設備の完全は素よりだが、其精神的の傷病者取扱ひは頭が下る。

私は各地の病院は必ず見舞つたが、只だ〇〇のそれは〇〇の都合上心ならずも果さなかつた。他

地方の病院は主として學校を之に當て、る。以下各病院のお話を綜合して其談を綴つて見る。

傷病患者の病床に在りての我慢強さには軍醫始め各係員を驚倒せしめてゐる。身は瀕死の重傷を受け淋漓たる鮮血に其命脈は正に絶へんとする兵士でも、苟くも上官の負傷者有る場合は其手當を先づ上官に譲り、上官はまた部下に對する手當をと、自分から避けて上下互に譲り合ふの光景は全く日本帝國軍人ならでは見る事の出来ぬ尊くもまた頼母しき狀景で有ると言ふ。斯くして一旦收容されし戦傷者は一刻も速かに治してくれ、そうして第一線へと、軍醫に迫るので軍醫も慰むる言葉もないこの事だ。手を失ひ脚を折られ、或は身に數彈を受けて居ても曾て呻吟の聲を聴かず。静寂其ものと言ふに到つては流石に死線を越えたる勇士の覺悟の程も察せられるではないか。

サル軍醫の話によると衛生隊員の活動振りも涙なくては聴かれぬ數々、更に赤十字看護婦として出勤の面々の健闘振りは時に兵士に一步を譲らぬと言ふ活躍振りだ。私は十勝國幕別村出身の福家止子さんが〇〇野戦病院に負傷兵收容の衝に當つて敵彈雨注の眞只中に飛び込んで「一刻の遅延は夫れ丈け多くの苦痛をかける早く止血せねばと」屏弱い女性とは言へ心は大和の女郎花、矢庭に負傷の勇士を背に負ふて美事に任を果したとの事である。其他の看護婦も吾れ劣らじと前線に行動して敏捷果敢の立廻りには只々驚嘆の外なく、彼の支那戦線に女學生が混り込んで赤化工作のお先棒を勤める輩とは凡そ似てもつかぬ日本女性の眞劍味コソ絶讃の價値は十二分に存在する。

次には戦地に於ける國防婦人會の傷病兵に對する奉仕で有る。彼等も亦た非常時局に即應して挺身患者の看護に服し、其他百般の勤務に當りて勞力を惜まぬあたり實に見上げたものである。私は北支



兵站病院中事政君の看護婦 (右てつ向) 福家君

渡航の途次、内地某市の陸軍病院を見舞つた。この時戦傷の一兵士が、「私が内地に送還せられて來たのは十月の末で有つた。この時某驛頭で白い前垂に國防婦人會の襷をかけた婦人の一群に出迎へを受けた。私等が擔荷に乗せられて汽車の窓から卸されるのを一向に無表情な顔で眺めて呉れて居た。當時の私共の姿は戦陣の土にまみれ、拭ふに暇なき汗と垢に見る影もない活ける屍で有つた。血と垢と汗の夏服、其姿は勿論穢なかつた事では有ろう。而しこうした者に對する同情らしい片鱗をも示さず、勿論何一つ面倒見やうともせぬ。私は其時に思つた。嗚呼之等の人々は何の目的で集つて來てるのかと、更に露骨に言ふならばこの國家重大時局を何と心得てるかと怒鳴つてやりたくも有つた」と當時を述懐した。一寸要求がましくも聴え

るかも知らんが、アノ戦線で力の限り闘つて来て呉れた勇士の眼には形式的に員數だけ揃へてある様なピールの空擧如き者共は不必要に相違ない。

吉屋信子女史が北京から歸つて「北平の日本婦人は金の有る者は皆避難したが、旅費もない貧乏人丈け後に残つて軍の厄介を受けて居た」と言ふ事を何かに書いた相で、北京に在る日本婦人を極度に憤慨させたと言ふ筆禍事件が有つた相だ。而かも事實は之に反して心ある日本婦人は手不足勝な軍隊のために一身を捧げて御手傳ひをして負傷軍人に心からの介抱を續けたとの事で、反つて上流婦人が自己一身の安全を希ふて遁逃するに比して其心情は洵に麗はしいと賞讃せねばならない。

こうした事件が本當に有つたとしたならばアタラ一流吉屋女史もいたく御綺量を下げた事に成る。否な單に御自身の綺量の低下では濟まぬ。眞乎の日本婦人の顔に泥を塗つた事にもなる。従つて其罪を深く天下に謝さねば成るまい。さもなくば貴女の作には一々嚴密なる検討が要求されて来る。

北京のみではない。傷病兵の收容所には其地方に在住の日本婦人が各々其分に應じて代る／＼看護に當り、大小便の世話から其他一切に對して親身も及ばぬ世話を續けて居る。勿論之等の婦人に暇が有ると言ふのではない。夫れ／＼に自己を犠牲とした尊い奉仕なのだ、患者は素より衛生隊員の誰も彼もが衷心の感謝を述べて居る。或る時の如きは一般に食料が缺乏して白米一俵が四十圓にも昂騰した事が有つた。否な夫れでも手に入らぬと言ふ實狀に陥つた。この時に日頃大切に仕舞つて有つたと

言ふ一俵の白米を持ち出してお粥を炊いて一同に給したとの美談さへ有る。

話しは後に戻るが〇〇の陸軍病院で私の腕章によつて北海道から來たと悟つたか、一兵士が君も北海道ですね、北海道からは兵隊婆さんが従軍して居て僕等も大變お世話になりました。どこかにまだ



兵隊婆のん高橋女史

居る筈です。是非お會ひなさいとの勧告だ。其名は高橋さんと言はれて此人の眞情には誰も彼も泣かされて居ますとの事だ。以來常に注意を拂つてたが、果せる哉丁度張家口で巡り合ふ事が出來た。束髮に軍人の外套と言ふ風變りだ。支那靴はいて、陽焦けした顔に紅潮の頬、見るからに健康を遺憾なく表はしてる。曾て新聞紙上にも其活躍振りを謳はれた高橋

たね子女史であつた。先方から「貴方は北海道の田村さん？ 北海道から來て下さつて私等も肩身が無いです。昨夜は一足違ひで失禮しました。患者さんに聴きますと態々患者をお見舞下さつて五時間／＼も亘つてお慰め下さつたとの事、本當に有り難ふ御座居ました。之れ迄方々からの慰問者が來られ

ても、精々自動車で乗りつけて事務所に顔を出す位が關の山、コンナ慰問なら何も遙々來て呉れるに及ばぬ。代議士だつて社大黨だつて本當に通り一遍の署名だけです。大體本當に慰問すると言ふ氣が有るならアンナに群をなし列を造つて歩くにも及ぶまい。互に手分けして訪問すれば多數の者を歡ばせる事も出来るのに、みんなあの様な態度に出るのを見ては名を慰問に藉りて實は北支見物が主たる用件と見做されても一言の辯解も出來まい」と婆さん中々雄辯に話される。全く首肯の數々だ、婆さんの爛眼は流石に膺物と眞物は識別されてる。

「今コソ慷慨悲憤ベツトの上に自由を奪はれて其快方を靜かに待つてる戦傷軍人も纏て來ん平和克復の後には天晴凱旋の時が來るのだ。其時には創痍のために手足を失ひ、又は兩眼の明を失した多くの戦傷兵が氣の毒にも澤山に故山へと歸られる事であらう。斯うした廢痼の勇士こそ實にも 皇國日本を本當に背負つて立ち上つた國寶的存在で有る。假令身は其自由を失つて居やうとも之等のよき配偶として若い娘さん達は喜んで結婚して上げて下さい。男子中の眞男子として其崇高なる本分を全ふした人々に對しては永久に之を慰むるの義務が吾々には均等に課せられねば成りません。」

女史は更に語をつぎて女學生其他に書を贈つて戦傷兵に對する月下氷人たる役割を買つて出やうとの意氣込だ。何と言ふ眞劍さだらう。女史が天津から太原方面の第一線に向はんとする間に自宅から受けた通信は、無事息災とのみ信じ且つ祈つた夫の死亡通知で有つた。この時の和歌は

わがせこは永久のねむりと知りぬれど

泣くひまもなしものゝふのため

年齒正に四十歳婆さんの尊號はソモ誰が呈した事か、とまれ北支出動將士より兵隊婆さんとしての敬意を拂はれて居る。婆さんの謂ふ英露の動向、日本國民の覺悟、日本婦人の覺醒、生活改善等の談は盡きねどソハ復た他日に譲り偏へに女史の健康を祈り斯かる意氣に燃ゆる烈女の輩出を祈つて歇まぬ。北京には現に自費を以て東京から來てる特志看護婦が二十名居る。軍では之等献身的奉仕の諸嬢に對して多大の感謝をしてる。

最後に〇〇野戦病院が敵襲を受けた事は既に新聞紙上にも散見されたが。全くあの時の勇敢振りは何としても筆舌の表現は許されなかつたとの事である。苟くも銃を持ちて起ち得る者は「大丈夫だから無理をしてはいかん」と何程止めても誰一人耳を藉さず猛然として守備に服し、自己の安全のみを謀る卑怯未練の振舞は一つもなかつたとの事で、こゝ一番と成つた時の日本軍の強さ加減は逆もく測量は出來ぬと言ふ事に確定した譯だ。

歩哨線の巡察

十二月五日午後八時〇〇飛行場で、久貫少尉、往住准尉以下帶廣市出身の林、倉井、藤本、名取の諸勇士の歩哨線巡察に隨行を許された。唯見る砥の如き飛行場、其完備した姿は到底筆舌の外だとは兵

士達の説明だつた。一里位の近接地から毎夜の様に銃聲が聞えて来ると聽かされて早速腰に吊したコルト式九連發拳銃に裝填してると側から「其のピストルに物言はせる様な事はせんから安心し給へ」と勇士の面々から力強く勵まされたが、さて無氣味な事夥だしい。三日の月は雲に隠れて星さへ疎らに四顧寂漠の道を辿つて肅々下士哨の彼方へと歩を運んだ。「誰かッ！」と一聲歩哨の聲に戦地ならでは聽き得られぬ一種の物凄さを感じしめられた。「巡察！ 久貫少尉」との應答に「御苦勞で有ります第○下士哨異状ありません」と緊張其ものの報告だ。「やあ御苦勞々々今晚は銃聲はどうだね」「ハッ今晚はまだ一發も聞えませんか」と言ふ所へ下士哨長が穴庫から出て来た「第○下士哨異状ありません。今晚は未だ銃聲が聞えませんが、どうぞ中へ這入つてお暖まり下さい」と案内をする。私等もアンペラの戸を押して中に入つて見ると土を掘り下げて三坪位の穴庫を造り、爐の様な土間にはアンペラを敷き石油の空罐に豆炭の火を起して有る。屋根は木を組み合はせ其上に高粱の殻を並べ其上に土を盛つてるのだ。小さいランプが一つ微かに此の室を照してる。勿論この火光は外には漏れない。

私等の挨拶がすむと一兵士は滲々と私の顔を見詰めて「如何にも似て居る。たしかにこの人だ」と言ひ乍ら突き出された新聞、そうして彼の指差す所の記事を見ると其所には十一月二十五日帶廣驛を出發せんとする英姿颯爽たる私の寫真を見るではないか。こんな處で出發當日の私に再會しやうとは夢想だにしなかつた事として一入の感が有つた。聞けば北海タイムス社の寄贈によつて懐かしの故國を

偲ぶ事が出来るので次から次へと廻覽して陣中の勇士を慰めつゝ有るとの事だ。手垢と土に穢れては居たがまだ破れては居なかつた。

郷里への傳言者は夫れく傳言帳に署名して貰つて次へと出發する。こうした突然の訪問に終始緊



下士哨に勤務中の林上等兵

張の勇士達は恰かも天使入來の如くに喜んで迎へてくれたが、流石に穴庫に別れを告ぐる時には一種悲愴な惜別の情で胸一パイになつて来る。

「この邊りは針鼠の跡が有る筈だ」と懐中電燈を地にスレ／＼に照らしてくれたが土が挿鉢を伏せた様に盛り上つて居るのは針鼠が持ち上げた所だと言ふ、しばらく行くと又之がある。この間は隧道になつてるとの事だ、恰度内地のモグラと同じ事をやつてる。小猫程の大きさで全身針を立てた様な小動物だ。

第○下士哨に向ふ途中遙か彼方に部落らしい燈火が見へるこの方面にけた、ましい銃聲が聞えて來

た。初めて聴く銃聲だ、しかしアレ文け遠ければ心配はないと皆が言ふので私もそう思つた。第〇、第〇と歩哨線を巡察して十一時頃歸營したが、こうした巡察中の一切も自由に筆する事は許されないのは心残りであるが、しかし此の廣い飛行場に蟻の子一匹だに這込ませぬと言ふ警備の完璧は只々驚くの外はない。寒風何時しか身に沁む今日此頃、まだ防寒の外套も靴も配給されぬ實狀に在り乍ら只だ一言寒いと呟つ將兵さへ居ない事を吾々は何として感謝したならい、のか、只々感涙は兩頬を走る。口こそ至誠と叫び奉公と號してもこうした如實の奉仕は何としても眞似る事は出来ないのだ。而かも將士の元氣はどこに行つてもはち切れ相な勢だ。

山西省方面の抗日

山西省は古來支那歴史に於て曾て冒されし事がなかつたと言ふ天嶮の地で有る。所謂一夫關に當れば萬夫も開くなしと自負し、天嶮に加ふるに人工の一切を盡した要害であつた。また之を守る敵は衆を頼み、剩さへ土着民の老幼婦女に至るまで心を合はせての抗日であつただけに 皇軍の惡戰苦闘も一通りではなかつた。舉國皆兵と言ふ語を如實に見せつけられたのは敵乍ら適れと讃稱したくもなる。こうした抗日意識は一體何に依て醸成されたか、と言ふ事も確かに研究の價値がある。ソレハ久しきに亘りて巢食ふて居た巨頭閻錫山が常に山西モンロー主義を唱へ、其教育方針として「良く學べ、

而して國家の爲に犠牲となれ、一寸の地と雖も外敵に侵されるな」と言ふ様な標語を民衆の腦裡に深く刻み込んで有つたと言ふ事である。此點から觀ると強ち赤化工作の成就した爲とは斷じ難い。遮莫、我には 明治大帝の下し賜ひし「一旦緩急有れば義勇公に奉じ」との 聖勅が有る。俄か造

の標語位に驚く筈はない。泥路峻嶮に明け暮れた上に糧道時に絶へ、彈藥其の悉くを射ち盡しての白兵戰に、大和男子の貫祿はみんごとくに發揮して日の御旗はモンロー山西の夢を醒まさせてやつたではないか。

其他中南支方面に於ける抗日も其由來する所は相當に古る。たしか大正八年頃からそろ／＼と排日ポイコツト



大同驛頭に立つ同行光崎氏

が採用され出した様に思ふ。學生も其頃から騒ぎ出してゐる。其後大正十四年になると波紋は遂に農村に迄も及ぼした。とりわけ學校に對する排日教育は頗る効果的のものたらしめた。彼の激越な字句を以てする排日ポスターは到る所の壁に柱に塔に張りつけられ、甚だしきに至りては日常流通の紙幣に

までも排日の二字が印されると言ふ具合に徹底せしめたのであつた。

こんな風に組織的に教育された青年子弟として我國に對する敵愾心の日に月に強烈に成つて來るのは寧ろ當然で有る。今回の事變に於て昔のチャンコロと聊か違つた手應への有つたのも故なきに非ずだ。併しこうした排日宣傳も素と支那國民全體の將來を想ふての義憤的行爲ではなく、畢竟は國民政府自體が自己満足の方便としての奸策以外に何物もないのだ。

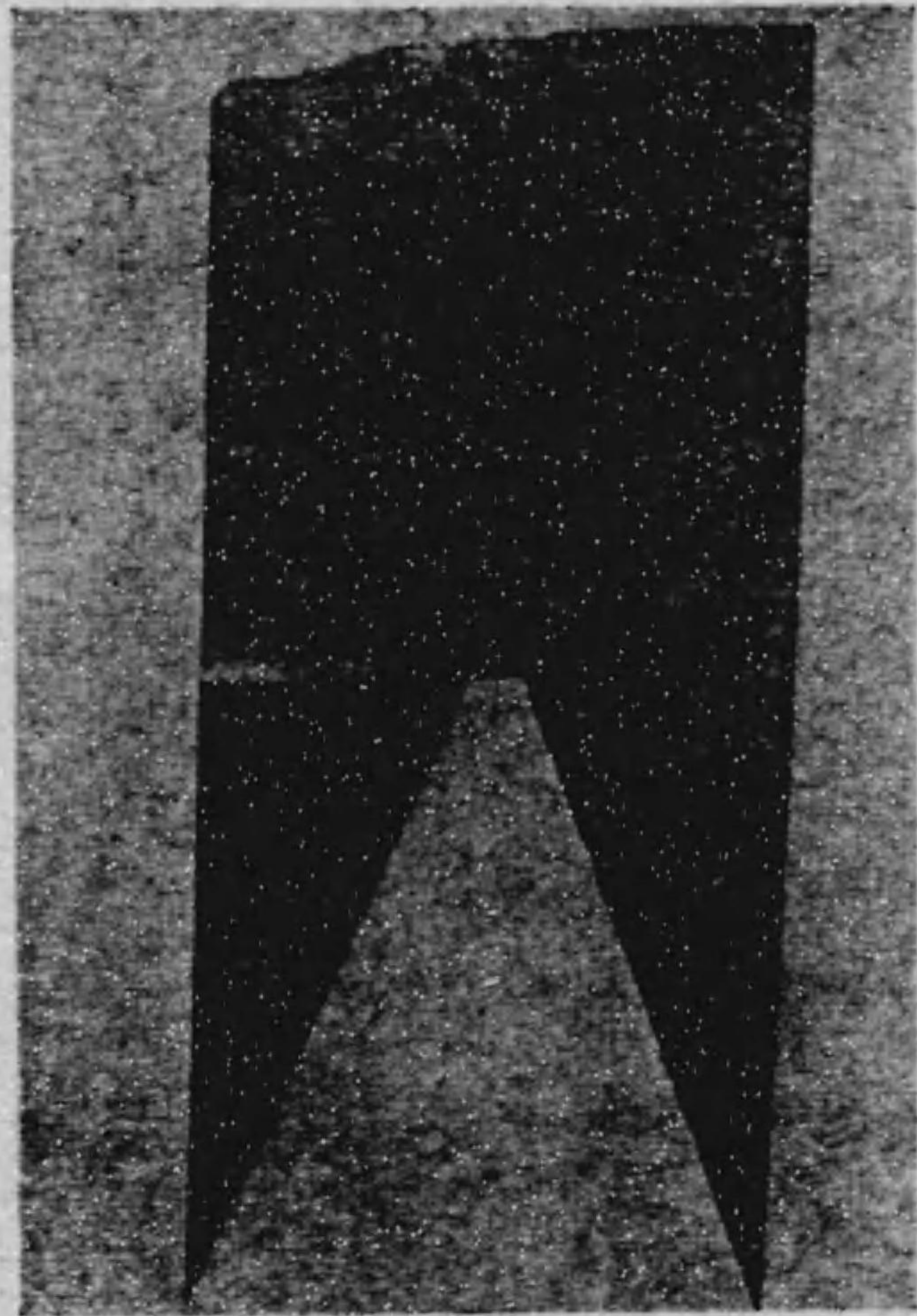
國策と言ふ美名に隠れて蒋介石の行動は餘りにも自己撞着が多すぎる。その著明な一例は赤化排撃を揚言した曾ての彼氏は、今では唯一の友としてソ聯の袖に縋りついたではないか。凡そ一國の政府が他の一國を指して公々然と排斥すべく教育すると言ふ様な事が國際的に許されるものであらうか。こうした事は支那なればこそと首肯されるが、又之を見て今日に及んだ我國民の氣も聊か永すぎた感もせられる。敗ける犬は聲を大にして吠えるが相手の隙を見て五寸一尺と後退する。長期抗戦とか最後の勝利とか、蔣の吠へ方も中々大きいサテ尾を捲いて遁逃するのも案外に早いかも知れない。

解し難い支那人の心理

大同からの歸路、〇〇〇に立寄つたのは十二日午後五時過ぎだつた。〇〇〇兵站病院に名譽の傷病將兵を見舞ひ約五時間を談じ此所を辭したのは既に十時、不案内の夜道を歩く氣にも成れず、一輛の人

力車を頼み悠揚車上の人と成つた。

兵燹を免れたかの様なこゝ、張家口市街の今宵は何と言ふ素晴らしい情景だらう。軒毎に吊した提燈の灯は晝を欺むき、家から家へと張り渡された赤、青、黄の旗は車上に在る私の面を撫するかの様、恰



旗の題問

も満艦飾其ものと言ひたい盛装である。不圖、旗、提燈に書かれた字を見ると『慶祝南京陷落大會』と一様に墨書して有る。一體何が大會か私には判らんかつたが、想ふに之等民衆が南京政府多年の桎梏を脱し、明朝北支の建設に轉ぜんとする歡喜に、恰かも南京の落城を聞いて蔣の再現最早憂ふるに足らずとの二つの理由で、この慶祝氣

分が顯現したものと想像された。しかし何れにせよ自分等の首都を敵國に屠られて隨喜慶祝と言ふ事は可成り變つた心理と言はねばならぬ。記念のためにと車上伸び上つて其旗の一枚をもぎ取つた瞬間、車夫は奇聲をあげて私を咎めた。と同時にバラ／＼と四方八方から集つて來た群集は完全に車上

の私を包圍して了つた。突差の出来事に驚いたもの、支那語を解せぬ私には辯解の自由すらない。一時はどうなる事かと思つたが、不圖護身用のピストルに氣付き、ポケットから掴み出しさま大聲一番怒號した積りだが實は案外に哀れな聲で有つたかも知れぬ。此の時何處からか駆けつけて来て呉れたおでん屋の日本人鈴木某氏が群集の中に割つて入り、私の眞意を先方に釋明してくれた事によつて支那人も漸く了解して引取つた。鈴木氏の談によれば此所の支那人は心から皇軍を信頼し敬服してゐるので、ラヂオによつて南京の陥落を知るや先を争ふて此通りに慶祝の意を表して居たので、其一枚毀損される事は彼等の祝意を冒瀆するものなりとの見解から斷乎として抗議を提出したのであつたとの事だ。彼等のこころした氣持を知つた時、東亞の盟主たる日本人の舉措は其一舉手一投足にも常に慎重の考慮を要する事を悟つた。

戦跡

敵を知らず己を知らざる者は百戰悉く敗る。とはとうの昔支那のおちさんが其子孫に訓へた戦術の大切な條項である。こころした千古不滅の戒慎を破る様な蔣介石が、いくら他力を頼んで見てももう蘇生の道はない。日本興し易しと豪語して見た所で晨に夕に御自分の足場が崩れて行く様では畢竟は奈落の底に顛落の外は有るまい。

北支那は戦術上黄河の線迄退き、南の方では戦術上南京の首都を棄て此次は戦術上の都合で重慶を

捨てるで有らう。

牝鷄晨を告ぐるは家に禍有り、とか哲夫成城哲婦傾家とか言ふ言葉の本来本元に生れ乍ら、其晨を告ぐる宋美齡だけは戦術上棄てられぬと有つては抑も四億の蒼生を奈何せんとするものぞ。燈は暗く美齡の袖に涙のかゝる時早くも明朝の光は北支の彼方より照り映えんとして來たではないか。

唐政の羈絆を脱して着々と復興の氣勢を示す天津の戦跡を訪ねる事にした。

友軍の孤立を見て急遽之を救ふべく出動せし我軍の行動を阻止せんとする目的の下に、其處に通ずる唯一の萬國橋を空高く吊り揚げてとうさんぼうを敢てした佛蘭西の行爲に、地圖駄踏んだ我軍は直ちに軍用鐵船を持ち出して友邦伊太利の諒解を得て其租界に渡つて危急を救ふた事は、當時の新聞で皆さん御承知の筈、其の鐵船は今も南岸に引揚げられて當時



伊太利租界に渡した鐵船

の無念を偲ばしめて居る。

市政府の跡と言ふ所に立つて始めて知つた爆撃の威力、全くよくもあんなに叮嚀に壊れたものだと三嘆の外はなかつた。鐵路局も概ね同じ運命の下に其廢墟振りを見せて居る。

工業大學、南海大學の爆撃は後に使用の出来る程度に手加減したらしく今では〇〇に〇〇に美事に使用されつゝある。其他の要所々々の爆撃は注文通りに行はれ、苟くも不必要の一發をも落してないと言ふ神技に至つては驚嘆の外ない。見廻る目には當時を追想して其壯烈と其果敢に快哉禁じ難いものが有るが、反對に先様の立場を考へて見ると凡そ之程恐ろしい事はなかつたらう。煉瓦と土ばかりで仕上げてる支那家屋ですら慘害目も當てられぬのに、之が若し日本内地の建物で有つたら其被害は更に幾倍を増して跡形もなく成つて了ふだらうと考へさせられた。防空の設備、空軍の擴充は一刻の油断も許されない。

次に北支一帶至る所で我が砲兵砲撃の跡を見た。其命中率に於て世界無比を誇る丈けに流石に物凄い程各急所を貫いてる。

平地戦に於ける敵の陣地は塹壕と穴と溝ばかりだ。此度の戦闘で敵弾も相當に命中率がよくて我軍を憐ませた相だがそれも其筈、彼等には朝夕に演習を續けて居たので改めて距離測定の必要もなし、命中するのが當然だ。今では高粱も取り去られて跡方もないが、丈餘に築つた高粱に視界を奪はれた

當時の我軍の苦戦を偲び、日一日と建設に邁進することの出来る様になつたのも、偏へに忠烈其職に

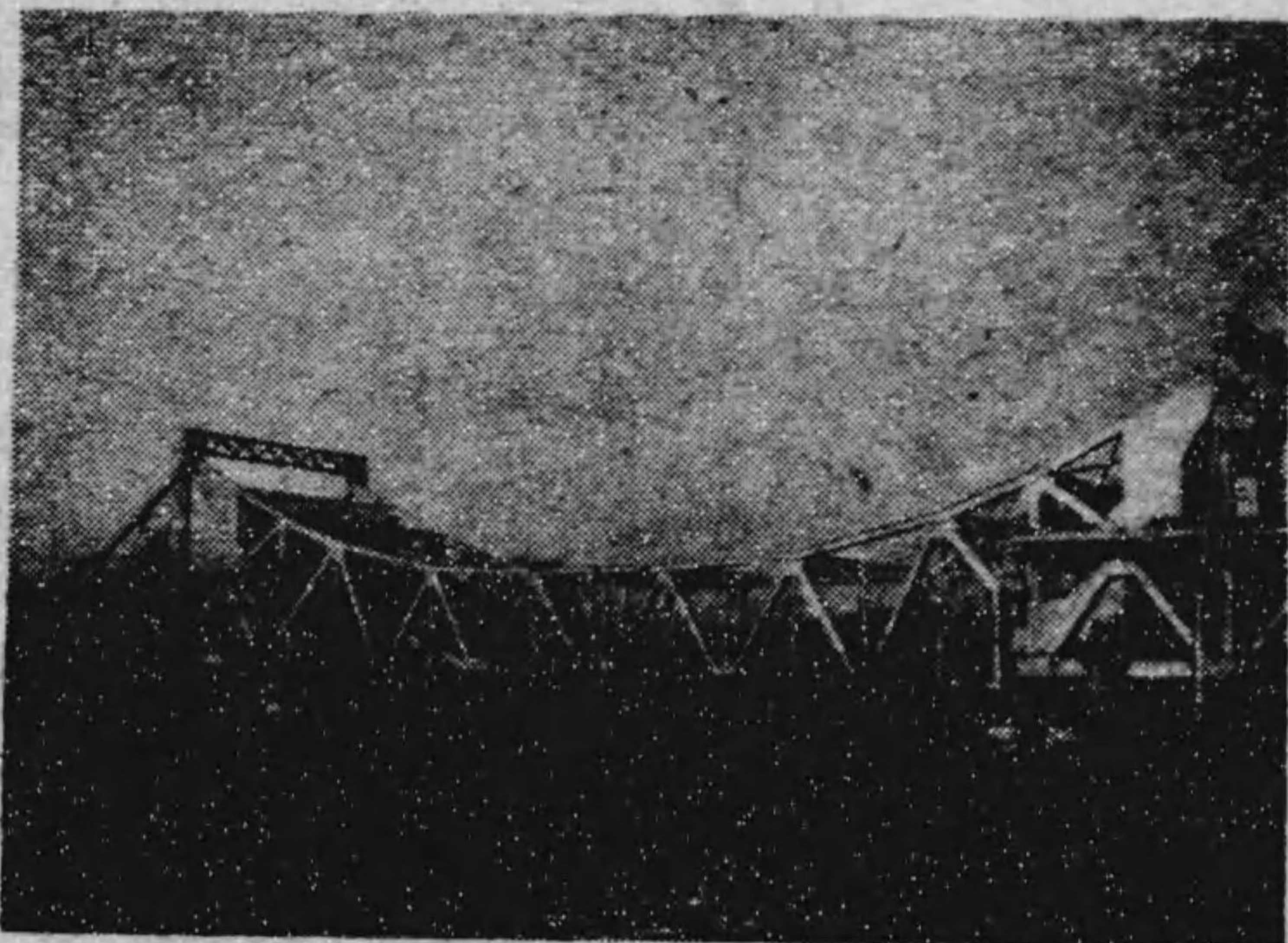
斃れた皇軍將士の御蔭だと思ふと、肅然として襟を正した。

保定では吉田部隊を訪ふた。元氣一パイの兵隊さん達の懐かし相に迎へてくれるのは何と形容していい、か判らぬ。銃後國民の期待に副ふべく將た又た日本傳統の歴史を傷つけざらしむべく、想像の出來ぬ奮闘を續けて重大任務を果しつゝある。

部隊の訪問に道を間違へて三里も迂廻して了つたが其途次昂の中にあちらこちらと土の盛り上つた敵死體埋没の箇所を見た。土を淺くかけて有るので野良犬がくはへ出して喰ふたらしく、手や足を外に出してゐるのは澤山見受けた。靴も服も大抵は土民が奪ひ取るのな

相で足が出て居ても皆洗足だ。スツ裸體のもあつた。

こうした死體の始末に對して將來改めて合葬するでもなければ念佛一つ言つてやるでなし、其姓名



怨のみ萬國橋

も判らねば誰の何男かも判らず、永遠に何が何やら薩張り判らずに終つて了ふのだ。恐らくは戦死者も何のための戦争か、何のための戦死か、勿論目的も理想もなかつたに違ひない。農民達も到る所の土饅頭に困るだらうと思はれるが此奴等も別に氣にもして居ないらしい。來春は土饅頭の上に南瓜でも播いてよりよき收穫を、とでも考へて居るのだらう。

北京に來た。城内も秩序整然和やかな風景だ。颯風の一過を想はしめるのは砲彈に崩された跡位のものだ。

〇〇飛行場には目下〇〇〇〇人の苦力を使つて色々と修復中だ。之等の苦力を監視してるのは我軍の兵士二三に過ぎない。時に噪はがしい事が有つても、監視の一喝に遇ふては忽ちに沈黙服従する相だ。

清朝の舊都たりし北京も時の流れに抗し難く、久しく南京政府に睨まれて居たが、今や時代は好轉して新政權の樹立をさへ聲明するに至つたのだ。激戦の地、居庸關は車窓の瞥見で書くべきなく張家口では學校跡の〇〇に見舞して衷心の感謝を表して來た。

各所で聞かされた事だが支那軍は夜間によく逆襲の舉に出た相だが、直前二十米突位の處まで來るのが關の山で、いくらこちらが少數でも挺身我が陣地に突入する者はないとの事だ。

寡兵でも潮時を計つて我方から突撃を取行すると彼等は算を亂して逃けると言ふ。我軍の快速隊は

時として敵陣奥深く突入して連絡を絶たれ苦戦に陥つた例もあるとの事だ。糧食は絶へ、水一滴を得ない様な時には朝露を手拭に集めてすゝつた相だ。鹽分を取る事の出来ない苦しさに汗を嘗めたなどは嘘の様な本當の話だ。張家口其他の城内には避難民のまだ歸らぬのが有る、概して大きな家が空家



陣中閑有り

になつてる。資産家は戸毎に土塀を圍らして匪賊の襲來に備へ、避難の場合には入口を煉瓦や土で密閉して行くが左様な防備は次の日には隣の者に破られて一切を取られる相だ。隣に匪賊が來て掠奪中を知つても其隣家の者は知らん顔して居られる程に支那人は憐憫の情がないのだ。利己萬能の末に到達する人の世はこんなものだらう。

戦跡を辿りて痛感した事は一般民衆が潑刺たる元氣で復興に勤しみつゝ、有る事だ。免疫性にしてくれた皇軍に對し彼等は心から感謝をせねばなるまい。猶ほ悪戦苦闘の戦跡は數限りないが是等は新聞雑誌によりて完全に報せられてるので割愛する。

戦死者を弔ふ光景

戦場に於て名譽の戦死を遂げた將兵を茶毘に付するに際しては之を一と纏めとして火葬し、其遺骨を適當に分配する。從來誰の分か誰の遺族に祭られるか判らぬとは餘りにも屢々聞かされた言葉であつた。然るに其の嚴格なる各別の取扱を實地に於て聽くに及んで、斯る不安を抱いた事の愚かさを心から恥ぢずには居られない。敵の死體こそ其所等邊に土葬され時には犬が掘り出して喰ひ散らし、鳥がおすそわけを戴いてるのを隨所で見受けたが、苟くも 皇軍の戦死體に對する限り眞に町重其もの取扱ひをして居る事は寧ろ想像以外で有る。火葬に際しては一々其官姓名を記録し血に塗れ、泥に穢れた箇所は一々綺麗に拭きとり、傷口には町重に繻帶を施し恰かも活ける人の如くに親切に之を扱ひ死體の上に木を載せるに忍びずと高粱の殻を以て軽く蔽ひ、下には支那家屋を打毀はした木を並べ之も木の上に寝かせては痛からうとの思ひやりで充分に高粱殻を重ねると言ふ心使ひに、讀經の僧侶をして涙滂沱たらしむるものが有ると言ふ。事實我が將兵の死體は其指一本と雖も荒野に晒さる、事はない。而かも其の火葬の跡には何れも墓標を建てられて有る私等も之等の墓標の前には一々黙禱を捧げる事が出来た。

また戦地で急造された骨箱に納まつて居る戦友に對しても、交る／＼其箱を撫で、恰かも活ける人

に語るが如く之を慰め或は花を摘んで靈前を飾り、或は線香代りに煙草を立て、其冥福を祈り、眞情其限りを盡す有様は實にも死生を誓ひし戦友ならではと思はしめる。其他各地に遺骨假安置所が設けられ、此所には司令官を首め戦友等が贈つた美事な花輪が所狭き迄に飾られ、香煙の縷々と立ち登つ



戦場に於て急造された骨箱に納まつて居る戦友に對しても、交る／＼其箱を撫で、恰かも活ける人

てゐるあたりは全く内地の想像を許さぬものが有る。斯くてこそ我が將兵は莞爾として死地に突入し得られるので有る。

戦場には屢々行衛不明者を出さしめる。如斯場合は軍としては徹底的に其生死を確かめ、死體の收容には常に全力を傾倒する。其一例として曾て新聞紙上に掲載されし飛行將校佐藤主計氏

(夫人は伊東海岸に於て殉死す)の死體引取の實況を聞きし儘に書いて見る。

佐藤氏は任を負ふて敵地上空飛翔中不幸にして敵陣に不時着し名譽の戦死を遂げたのであつたが、幸にも某國宣教師の好意によりて死體は假埋葬に付し有りとの情報を得た。よつて我軍では直ちに○

○基地より三十五里の地點たる假葬地向ふべくトラック八臺に○部隊員百名を分乗せしめ出發せしめたのであつた。併し其地點は我軍の第一線より遙か六里の前方に在り、而かも敵兵約五千が横行中なりし爲め、其宣教師も我軍の寡兵を見て其冒險を想ひ絶對に道案内を拒絶せしめたため止むなく『我々は先頭部隊として只今到着せるものにして大部隊は續々と到着の筈』と告げ、漸くにして現地に案内せしめ、千辛萬苦五日間を要して死體引取の目的を達したと言ふ事である。

斯の如く死者を遇する上に一點の粗漏なきは何等疑ふの餘地はないのである。従つて假令無言の凱旋を迎へても其遺骨は曾て驛頭に見送りし颯爽たりし其人の姿を變へしものとして敬虔眞摯の出迎へを成すべきは當然である。

不幸這回の事變に斃れし遺族の各位に對し私は此紙上を藉りて深甚の敬意を捧ぐるものである。

慰問袋と慰問文

慰問袋を明けると

手紙は無いか？

寫真はないか？

と之を探るのが常だと言ふ。日用品よりも食物よりもこの寫真と手紙が戰士に對する唯一の慰安とな

るらしい。或一兵士は未知の人から寄せられた眞情罩めた一通の慰問狀を肌身を放さず三箇月持つて歩いたとてクシャ／＼に成つたのを私に示された。兵站病院では枕元に積み重ねて日に何回となく讀み返し、戦友互に見せ合ふとの事である。中には其一句一句をも暗記してゐる者さへ有る。ソレ程に

尊くも喜ばれる物で有つたらなせ早く送つて上げんかつたらうと今更に口惜しい。

各地各方面の勇士に就て聽きたゞしと見ると不思議にも公職者からの慰問狀の届いて居らぬ事でも有つた。國府道縣市町村會議員程筆まめに手紙を出す者は世の中になからうと想像して居たのには是はまた何と言ふ珍現象だらう。



我が爆撃に會ひし廊坊の司令部

彼等が立候補當時は未知の人達に對して迄も恰かも百年の知己の如くにすり寄り、其手紙も三本五本は愚か電報迄も發して自己のために清き一票をと屈原氣取つて肉迫して來たので有つた。しかし其身一度公職を帯ぶるや出しすぎた手紙の埋め合せか、阿附迎合の種子切れか、其多くは反動的症狀に陥

る。荒漠たる北支の戦線に國難を一身に背負ふて立つ勇士に對して電報は抜きにしても、セメテ慰問文位は眞夜中に飛び起きてでも書いて貰ひたいものである。感謝状の一章さへ綴れぬ議員は實は直ちにおやめになつた方が良いと迄義憤される。

だが實は斯う言ふ私自身も今コソ現地へ御禮に廻らせて載せて感じたので、今迄は手紙も怠つて居た一人である。洵に相濟まぬ次第であつた。以來は同罪の諸士と共に改心して拙ない筆でも運んで見る事を誓ふて御詫びとする。

慰問の形式と言ふと妙だが兵營と言はず、病院と言はず、半折の書箋紙に「打倒暴軍援助良民」とか掃蕩共匪とか智勇如神とか東方法徳の發揚とか言つた風の太書或は無邪氣な小學生の圖書等が壁に張られてあつた。前者の大書は滿洲國の學生連中の寄贈にかゝるものらしい。猶ほ病院では枕元に小學生の造つた人形なども飾られて居た。

次には慰問品だが一般の慰問袋は

- 一、發送後現地著迄に二三ヶ月の日子を要す。
- 二、時に雨露に晒される。
- 三、何地何方面にて配分されるか判らぬために思はぬ滑稽が起る。假令ば北支へとの心盡しから防寒具を入れたのが南支にて支給されて不用になる如き。

四、取扱ひが荒いので燻入りの水ものが毀れると時として厚意が反つて禍となる。こんな點は考慮せねば成らぬ。然らば概ねどんな品がい、かと言ふと、

- 一、感謝を罩めた慰問狀、寫眞、郷土の新聞、雜誌。
- 二、變質せぬ郷土の産物、スルメ、貝柱、乾魚、昆布、菓子。
- 三、風藥、腹藥、熱さまし、と言ふ様な割合に良い膏藥、(全體醫療の機關は完備し在るも戦場の將兵は僅かな事で醫療を受ける事を一種の恥辱としてるので持ち合せによりて或る程度の早期治療が出来ること、なる)

四、蓄音機のレコード、病院等には何とかして贈りたい。軍歌、詩吟、浪花節、漫才等、

五、晒木綿は非常に利用の道が廣く一般に喜ばれてる。之は腹巻にも繻帶にも銃掃除にもさしては襪にも鉢巻襪と効果百パーセントだ。

六、印刷慰問文、之は多少費用はかゝるが學校生徒に思ふ儘に慰問文を綴らせて印刷に付し小冊子として贈る。之は私が此度の慰問に際して北海道の十勝を中心に學生のを集め、道長官其他の道内名士の感想等も蒐めて五十頁の四六版小冊子として携行頒付したので有つたが、意外に歡迎された。

新聞は戦場の勇士を慰むるに最も大切な役割を果してゐる。殊に郷里の新聞は一人に其感が深い、面白い記事とか變つた出来事には代る／＼赤線を引いて見せ合つてゐる。

この新聞記事に就ての感想を述べて見たい。ソレハ記事の選擇に細心の注意が望ましいので有る。或る新聞の記事に「應召者の家族に其困窮を察し扶助を贈らんとせしに對し家族の者は之を固辭し、「左様な事をして戴いては名譽有る出征者の恥辱にも成る」とて其一切を辭退し健氣にも不自由を忍んで暮して居る」とか或は「學校を止めて家業の手助けをした」とかを美談其ものとして掲載して居るのが有る。即ちこうした記事は只だ一人の老父、母、とか病に臥した妻子を遺して勇躍出征するに當り、後事萬端を銃後に委ねて何等後顧はないものと安心して出た者の目で見ると一種言ひ知れぬ沈痛の氣分に成る。之は私が實際に聞かされた話で有つた。新聞記事の美談、快舉は常に何人が之を學びても夫れが社會に對して稱揚さる、所のもので有らねばならない。巨萬の富を擁する守錢奴が偶々千金を出したりとて強ち大した美舉とは稱し難い。杖とも柱とも頼む家庭の中堅を失つた事によつて扶助を受け様ともソレが何の恥ぞ、ソレが何故に申譯が無い。こうした記事は恰かも扶助其ものの拒

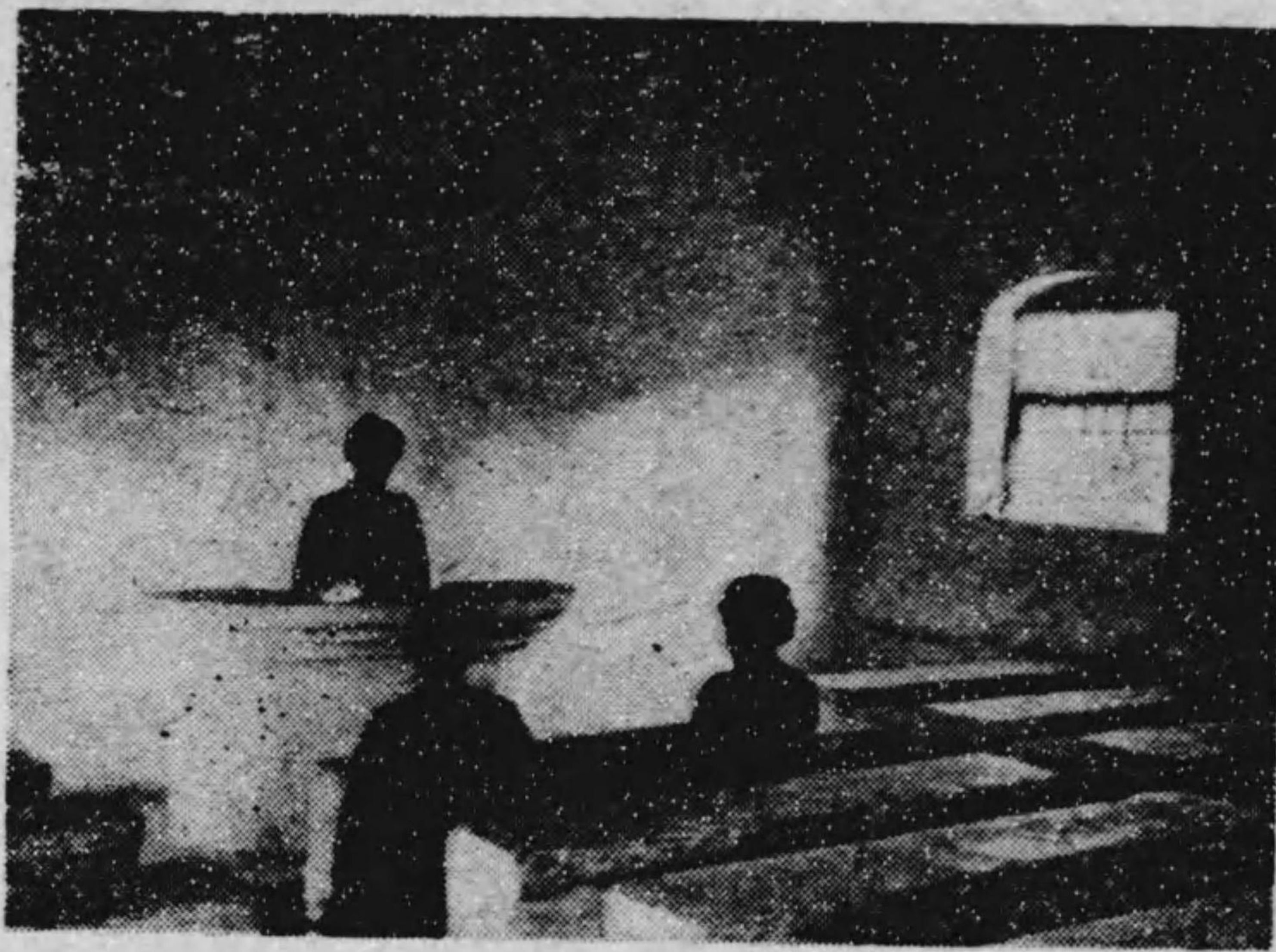
絶を強要せんとする一種の宣傳とも成る。私は寧ろ應召員家族中に萬々一不如意の生活者は無いか。

と言ふ方面に新聞社も活躍をして貰ひたい。と共に銃後のお互は出征者家族に對する満腔の同情を寄せやうではないか。

更に家族中に不幸等有りし場合も之を秘する事が美談かの如くに報じてるが。之等も亦た思はざるの甚だしきもので、ソウシタ非常の出来事は寧ろ明かに通報し、假令異域に有り共其祭禮に對しは默禱を捧げ得る丈けの連絡が大切で有る。戦場の勇士を産後の婦人の如くに取扱ふ事は少く共勇士を侮辱する事になる。此邊の熟慮を要望する。

此事に關しては陸海軍、内務省其他に對して愚見を開陳し御同感を得た譯である。

猶ほ各部隊將兵各位の元氣一杯な行動は言ひ知れぬ心強さを感じて來た。此點は御安心を願ふ事にしたい。



宋哲元兵舎の講堂の土机

軍馬

北海道産の軍馬の強いと言ふ事はかねてから聞かされては居たが、今回現地に於て其實際を見聞し一驚を喫した。ナゼ強いのか？ 左様な事は獣醫さんに聴くが、。どんな風に強いのか？ 夫れは中々に落伍しないのだ。従つて死亡率が少いのだ。人の食物さへ杜絶え勝の時に馬糧の有らう筈はない。人の飲料に事缺く時は馬も自づから渴して居る。際限なしと疑はれる泥道に馬腹を没しての行軍だ。人も馬も只だ黙々として進む、勿論馬に敵愾心の有らう筈はない。武士は食はねどと言ふ頑張りも求むる譯に行かぬ。つまり正味一杯の體力比べだ。この體力に於て幾パーセントか北海道産の馬が強いのが良く判つた。之は畢竟するに酷寒裡に放牧され、炎暑裡にも克く孜々營々として働いて來た賜だ。之からは月も凍らん北支の野に北海道産の眞價はいよ／＼發揮される事だらう。洵に頼母しい事だ。私は腕章に北海道と大書してたので時々「君は北海道かい、北海道の兵も軍馬も斷然強いよ」と褒められたのは何共痛快で有つた。しかし馬は同感だが兵隊さんは 陛下の軍隊として立派に統一された今日、甲乙の有らう筈はない。

意外に感じたのはアノヨチ／＼とした姿の支那の驢馬が強いと言ふ事だ。しかしマダ其上に蒙古産の小さいが骨格の頑丈な奴が居る。

夫れから大體に隊馬は徵發馬に比して斷然強いと言はれてる。之等も皆平時訓練の結果なるべく、將來の産馬獎勵の上にも斯かる訓練の忽にすべからざるを想到させる。

次に精根全く盡き果て、斃れた愛馬と別れる刹那の愛着は何とも言へぬとの事である。蓋しさもありなん、苦樂を共に萬里の異域に來て、今は動けぬからとて死に切らぬ愛馬を跡に、進まねば成らぬ勇士の胸中は想ふだに涙をそゝる。捨てられた馬の首に「何方でも食物を與へて下さい」との紙片を吊るして前進した勇士も有つたとか、其眞情は聽て可憐の馬の冥福とも成る事であらう。日本の馬は皆敵の方に向つて死んでるとの事も聞かされたが、主人の進んで行つた方を慕ふて伸び上り／＼哀れにも死んで行つた事だらう。

之等の無言の勇者軍馬の死體もいとも懇ろに土葬され、其骸は遺骨代りに故國に凱旋させる事に成つてゐる。

軍馬の靈を祭り其忠烈を讃ふる事も決して怠つてはならない。

結語

感激に出發して更に一層の感激に匆惶として引返した私は、東京日比谷公會堂に於ける日本青年黨時局演説會の眞只中に飛入りして 皇軍の活躍状況を具さに報告する傍ら銃後の活躍一層切ならん事

を熱望した。亞いで陸海軍・内務の各省を訪ひ愚見を開陳して善處有らん事を求め、向後史に機會を捕へて南支方面及び海軍の慰問を執行すべく諒解を得た。〇〇に於ては懐かしの〇〇隊を訪ひ、廣辻部隊長並に金堂隊長の多大の御配慮に浴した事を謝して置きたい。此地方は這次の戦闘中最も激烈を極めた所と言はれてゐるが、今では警備の將兵も和やかに語りひつゝ、其備だけは嚴にしてゐる。金堂隊長の思ひやりに兵士達も感激の日を送つて居た。

其他書き連ねたい事は數々だが、歳末刻々に迫り思策も自づから散漫の嫌が有るので此邊で一先づ筆を擱く事にする。

(終)

昭和十二年十二月二十七日 印刷納本
昭和十三年一月一日 發行

非賣品

編輯兼發行人 田村甚藏
北海道帶廣市西一條十二ノ三

印刷人 田名網徳次郎
東京市小石川區駕籠町一八五

發行所

北海道帶廣市西一條十二ノ三
皇民社本部
電話二六八番

17